2003(平成15)年 1月24日 発行

島根大学埋蔵文化財調査研究センター報

今昔の掛け橋

No. 24

島根大学埋蔵文化財調査研究センター刊行　〒690-8504 島根県松江市西川津町1060　TEL/FAX：0852-32-6496
ホームページ：http://www.shimane-u.ac.jp/info/maibunn/index.htm

特集記事

「木工文化の源流」

～発掘で分かった森と人との歴史～

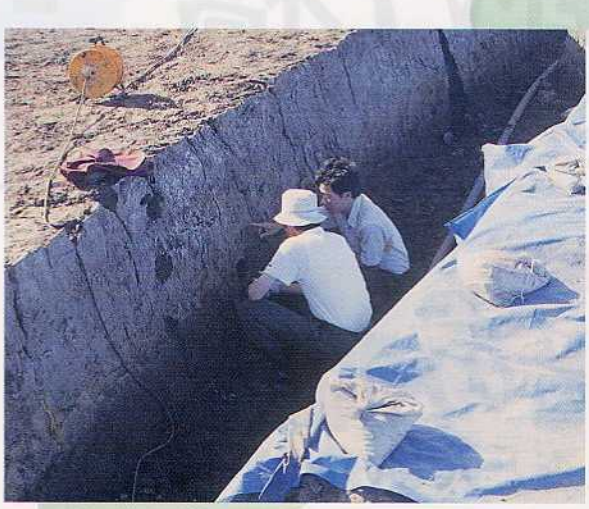
舟をこぐ少年（ネパールにて）

豊かな森に恵まれた日本列島では、木を加工して利用する文化が、脈々と営まれてきました。

しかし、木製品は、朽ち果ててしまいやすく、遺跡から出土することは、あまりありません。島根大学構内遺跡は、低湿地遺跡という性格から、縄文時代以来、たくさんの木製品が地中にそのままの状態で保存されてきました。

この特集記事では、島大キャンパスから出土した考古資料をとおして、木工文化の歴史について具体的に探っていきます。

1. 森の歴史 ～島大周辺にはどんな植物が生えていたか？～



第2体育館建設に伴う調査にて

発掘調査で採取した土の中には、当時の植物の花粉がたくさん残されています。これらをていねいに分析鑑定すれば、島大周辺にどんな木や草が生えていたかを知ることができます。ただの土でも、宝の山なのです。

プレパラート作業風景

島大キャンパスには、何千年も前の木材が、大量に埋まっています。これらは、1点1点、カミソリを使い、手作業でプレパラートにし、樹種を鑑定します。この作業に、手間と根気を費やします。

モミ林などの時代	コナラ・クヌギ林の時代	カシ・シイ林（照葉樹林）の時代
（縄文早期：～約8000年前頃～）	（縄文早期末～前期：約6300～5000年前頃）	（縄文中期以降：約5000年前頃以降）
	温暖化で、山にはカシ類・シイ類の林が広がっていきましたが、島大キャンパスの丘陵（教育学部棟など）は、コナラ・クヌギ林でした。	コナラ・クヌギが減り、カシ類・シイ類の林に覆われます。照葉樹林と呼ばれる林で、現在では、楽山（松江市）や島根半島（美保関町）でみることができます。

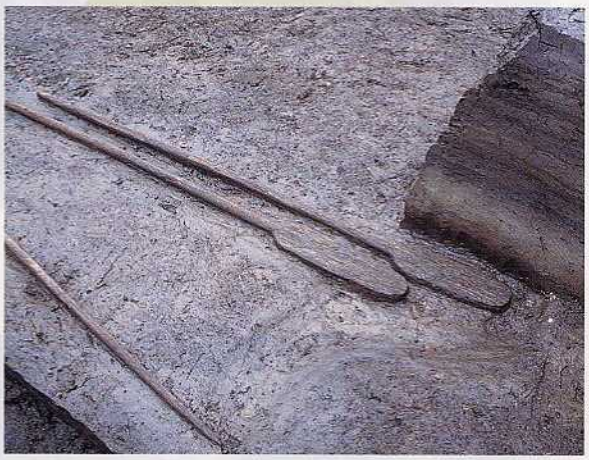
＊樹木写真は、『日本の野生植物・木本1』佐竹義輔他編（平凡社 1989）から転載。

2. 森と人の関わり ～木工文化の始原・縄文前期の木材加工～

縄文前期（約6000～5000年前頃）は、遺跡から本格的に木製品が出土してくる時代です。人類による木材利用は、それ以前にも想定されますが、遺跡からはあまり見つかっていません。

島根大学構内遺跡からは、縄文前期頃の木製品がたくさん出土しています。これらは、当時の木工技術を知るうえで、大変貴重な資料です。

当時は、鉄器がありませんので、石の道具だけを使って、原材を焦がしながら、加工しました。木製品を観察すると、表面に焦がした跡が残っています。



櫂とヤス柄（約5200年前、グランド東側）

縄文前期の木製品

3. いろいろな木製品

正門の下から見つかった川跡

島根大学正門や総合理工学部棟周辺からは、弥生～奈良時代頃に流れていた小さな川が見つかっています。こうした川からは、捨てられた木製品が、たくさん出土しています。

出土した木製品には、板材・角材・棒材・容器など、いろいろな種類があります。

これらは、スギの木が用いられることが多いようです。スギは、軽くて加工しやすい特徴をもっており、昔から好んで使われてきました。

いろいろな木製品

4. 用途に応じたいろいろな杭 ～長さ・太さ・形～

杭は、細長い材の先端を尖らせて作る単純な木製品で、縄文時代から現代まで、営々とみることができます。

同じ杭でも、太さや長さは様々です。また、先端部分が、尖って鋭利なものや、尖っていないもの、削り面が多くあるもの、一部だけしか削ってないものなど、形も様々です。用途によって使い分けていたのでしょうか。

水辺だった場所から出土する場合が多く、川の岸辺に打ち込まれた状態で検出されたものもあります。

いろいろな杭(弥生～奈良時代)

川に打ち込まれた杭
(総合理工学部1号館西側)

川に打ち込まれた杭
(総合理工学部1号館南側)

～埋文センター展示室のご案内～

■開館時間　午前8時30分～午後5時

■休 館 日　毎週土日曜日
年末年始［12月29日～1月3日］

■全国の博物館から届いたポスター・無料招待券等、ご自由にお取り下さい。